

2009 年 10 月 22 日 (2009 年 11 月 19 日訂正)

山田光太郎

kotaro@math.titech.ac.jp

## 多様体論特論第二 講義資料 2

### お知らせ

- この授業の web ページの公開を始めました :

<http://www.math.titech.ac.jp/kotaro/class/2009/manifold-2/>

<http://www.official.kotaroy.com/class/2009/manifold-2/>

<http://kotaro.math.kyushu-u.ac.jp/class/2009/manifold-2/>

- 単位を必要とする方は、本日配布する用紙にある問題に回答し、次回の授業開始前に提出してください。なお、整理の都合上、所定の用紙以外での提出はご遠慮ください。
- 次回の授業は 11 月 17 日 (火), 19 日 (木) です。

## 2 球面と双曲空間

### 2.1 双曲空間

#### 2.1.1 ミンコフスキー空間の双曲面

$L^4$  : 符号  $(-, +, +, +)$  の内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  を持つミンコフスキー空間 :

$$\langle \mathbf{x}, \mathbf{y} \rangle = -x_0y_0 + x_1y_1 + x_2y_2 + x_3y_3 \quad \mathbf{x} = (x_0, x_1, x_2, x_3), \mathbf{y} = (y_0, y_1, y_2, y_3).$$

$H^3$  :  $L^4$  の「二葉双曲面」の上半分 :

$$H^3 = \{p \in L^4 \mid \langle p, p \rangle = -1, p_0 > 0\} \quad (p = (p_0, p_1, p_2, p_3)).$$

事実 2.1.  $H^3$  は  $L^4$  の滑らかで連結かつ単連結な部分多様体である . とくに

$$T_p H^3 = \{v \in L^4 \mid \langle p, v \rangle = 0\} = p^\perp$$

事実 2.2. 各  $p \in H^3$  に対して , 内積  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  の  $T_p H^3$  への制限は正定値 . したがって  $H^3$  は  $\langle \cdot, \cdot \rangle$  から定まる計量により , リーマン多様体になる .  $D$  をこの計量に関する標準接続とすると ,

$$D_X Y = d_X Y - \langle X, Y \rangle p = dY(X) + \langle d_X Y, p \rangle p \quad (X, Y \in \mathfrak{X}(M))$$

である . ただし  $d$  はアフィン空間  $L^4$  の標準接続 , すなわち  $d_X Y$  はベクトル場  $Y$  の  $X$  方向の方向微分である . これを用いて

$$H^3 \text{ の断面曲率は } -1 .$$

$$\begin{aligned} TH^3 &= \{(p, \nu) \mid \langle p, \nu \rangle = 0, \langle p, p \rangle = -1, p_0 > 0\} \in L^4 \times L^4, \\ T_1 H^3 &= \{(p, \nu) \mid \langle p, \nu \rangle = 0, \langle \nu, \nu \rangle = 1, \langle p, p \rangle = -1, p_0 > 0\} \in L^4 \times L^4. \end{aligned}$$

事実 2.3. 点  $p \in H^3$  において速度  $v \in T_p H^3$  ( $\langle v, v \rangle = 1$ ) をもつ  $H^3$  の測地線は弧長径数を用いて

$$\gamma_{p, v}(s) := (\cosh s)p + (\sinh s)v$$

で表示される . とくに , 任意の測地線は  $\mathbb{R}$  全体で定義されるから  $H^3$  は完備である .

以上より ,

$H^3$  は単連結かつ連結な完備リーマン多様体である .

定義 2.4.  $H^3$  を 3 次元双曲空間とよぶ

## 2.1.2 等長変換

定義 2.5.

$$\begin{aligned} O(3,1) &= \{a \in M(4) \mid {}^t a Y a = Y.\} \\ SO(3,1) &= \{a \in O(3,1) \mid \det a = 1\} \\ SO_+(3,1) &= \{a \in SO(3,1) \mid a_{00} > 0\} \end{aligned} \quad \left( Y = \begin{pmatrix} -1 & 0 & 0 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 \\ 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 0 & 0 & 1 \end{pmatrix} \right)$$

事実 2.6. (1)  $O(3,1)$  は  $L^4$  に線形かつ等長的に作用する. 逆に  $L^4$  の等長的な線形変換  $\in O(3,1)$ .(2)  $SO_+(3,1)$  は  $O(3,1)$  の単位元を含む連結成分である.(3)  $SO_+(3,1)$  の  $L^4$  への作用は  $H^3$  を保つ.(4)  $SO_+(3,1)$  は  $H^3$  の向きを保つ等長変換全体がなす群である.

## 2.1.3 理想境界

定義 2.7.  $v \in L^4$  が零的 (null) であるとは,  $\langle v, v \rangle = 0$  となることである. さらに

$$\begin{aligned} LC &= \{v \in L^4 \mid \langle v, v \rangle = 0\} \\ LC_+ &= \{v = (v_0, v_1, v_2, v_3) \in L^4 \mid v_0 > 0\} \end{aligned}$$

補題 2.8.  $v, w \in LC_+$  が  $\langle v, w \rangle = 0$  を満たすならば  $v = cw$  をみたす  $c \in \mathbf{R}_+$  が存在する.補題 2.9.  $p \in H^3$ ,  $v = T_p H^3$ ,  $\langle v, v \rangle = 1$  ならば  $p + v \in LC_+$ .定義 2.10. 弧長により径数づけられた 2 つの測地線  $\gamma_1, \gamma_2$  が漸近的であるとは

$$\{d(\gamma_1(s), \gamma_2(s)) \mid s > 0\}$$

が上に有界となることである. このとき  $\gamma_1 \sim \gamma_2$  と書く.測地線の漸近類を  $H^3$  の理想境界という:

$$\partial H^3 = \{H^3 \text{ の測地線}\} / \sim$$

補題 2.11. 測地線  $\gamma_{p,v}$  と  $\gamma_{q,w}$  が漸近的であるための必要十分条件は  $\langle p + v, q + w \rangle = 0$  となることである.

したがって

$$\partial H^3 = LC_+ / \mathbf{R}_+$$

である.  $v \in LC_+$  なら  $v_0^2 = v_1^2 + v_2^2 + v_3^2$  であるから,

$$\begin{aligned} LC_+ \ni (v_0, v_1, v_2, v_3) &\mapsto \left( \frac{v_1}{v_0}, \frac{v_2}{v_0}, \frac{v_3}{v_0} \right) \in S^2 \\ &\mapsto \frac{v_1 + iv_2}{v_0 - v_3} \in \mathbf{C} \cup \{\infty\} \end{aligned}$$

となるが, この写像が誘導する対応  $LC_+ / \mathbf{R}_+ \rightarrow \mathbf{C} \cup \{\infty\}$  は全単射

(2.1) 
$$\iota: \partial H^3 \longrightarrow \mathbf{C} \cup \{\infty\}$$

をあたえる.

## 2.2 $2 \times 2$ 行列での表示

### 2.2.1 エルミート行列での表示

2次エルミート行列全体の集合を  $\text{Herm}(2)$  と書く。  $\text{Herm}(2)$  と  $L^4$  を次のように 1対1 に対応づける：

$$L^4 \ni (x_0, x_1, x_2, x_3) \longleftrightarrow \begin{pmatrix} x_0 + x_3 & x_1 + ix_2 \\ x_1 - ix_2 & x_0 - x_3 \end{pmatrix} \in \text{Herm}(2).$$

すると、 $L^4$  の標準基底  $e_0, e_1, e_2, e_3$  は次の行列に対応する：

$$(2.2) \quad \sigma_0 = \text{id}, \quad \sigma_1 = \begin{pmatrix} 0 & 1 \\ 1 & 0 \end{pmatrix}, \quad \sigma_2 = \begin{pmatrix} 0 & i \\ -i & 0 \end{pmatrix}, \quad \sigma_3 = \begin{pmatrix} 1 & 0 \\ 0 & -1 \end{pmatrix}.$$

### 2.2.2 余因子行列と内積

定義 2.12. 2次行列  $X$  に対して、その余因子行列を  $\tilde{X}$  と書く：

$$\tilde{X} = \text{tr } X \text{ id} - X.$$

補題 2.13. (1) 対応  $X \mapsto \tilde{X}$  は線形。

$$(2) \quad \widetilde{XY} = \tilde{Y}\tilde{X}.$$

$$(3) \quad \tilde{X}X = \det X \text{ id}.$$

事実 2.14.  $\text{Herm}(2)$  を  $L^4$  と同一視するとき

$$\langle X, Y \rangle = -\frac{1}{2} \text{tr } \tilde{X}Y, \quad \langle X, X \rangle = -\det X.$$

### 2.2.3 等長変換群

行列  $a \in \text{SL}(2, \mathbf{C})$  に対して

$$\tau_a: \text{Herm}(2) \ni X \longmapsto aXa^* \in \text{Herm}(2) \quad (a^* = {}^t\bar{a})$$

は  $\text{Herm}(2) = L^4$  の等長変換をあたえている。したがって、対応する  $\mu_a \in \text{SO}_+(3, 1)$  がただ一つ存在する。  
すなわち、準同型

$$\mu: \text{SL}(2, \mathbf{C}) \ni a \longmapsto \mu_a \in \text{SO}_+(3, 1)$$

が得られる。

事実 2.15.  $\text{Ker } \mu = \{\pm \text{id}\}$ .

したがって

$$\text{PSL}(2, \mathbf{C}) = \text{SL}(2, \mathbf{C})/\{\pm \text{id}\} \text{ と } \text{SO}_+(3, 1) \text{ は同型である。}$$

### 2.2.4 双曲空間の対称空間としての表示

事実 2.16. いままでの同一視の下、

$$\begin{aligned} H^3 &= \{X \in \text{Herm}(2) \mid \det X = 1, \text{tr } X > 0\} \\ &= \{aa^* \mid a \in \text{SL}(2, \mathbf{C})\} \\ &= \text{SL}(2, \mathbf{C})/\text{SU}(2) \end{aligned}$$

である .

とくに ,  $\mathrm{PSL}(2, \mathbf{C})$  は  $H^3$  の向きを保つ等長変換がなす群である .

### 2.2.5 等長変換の理想境界への作用

事実 2.17. 写像  $\iota$  (式 (2.1)) による同一視の下 ,  $a \in \mathrm{SL}(2, \mathbf{C})$  があたえる  $H^3$  の等長変換は

$$\partial H^3 = \mathbf{C} \cup \{\infty\} \ni \zeta \longmapsto a \star \zeta = \frac{a_{11}\zeta + a_{12}}{a_{21}\zeta + a_{22}} \in \mathbf{C} \cup \{\infty\}$$

のようにして , 理想境界にメビウス変換として作用する .

## 2.3 単位球モデルと上半空間モデル

次の二つのリーマン多様体は , いずれも双曲空間 (と等長的) である :

$$(D, ds_D^2) : D = \{X = (X_1, X_2, X_3) \in \mathbf{R}^3 \mid |X| < 1\}, \quad ds_D^2 = \frac{4}{(1 - |X|^2)^2} (dX_1^2 + dX_2^2 + dX_3^2)$$

$$(H, ds_H^2) : H = \{X = (X_1, X_2, X_3) \in \mathbf{R}^3 \mid X_3 > 0\}, \quad ds_H^2 = \frac{1}{X_3^2} (dX_1^2 + dX_2^2 + dX_3^2).$$

実際 ,

$$\pi_D : H^3 \ni (x_0, x_1, x_2, x_3) \longmapsto \frac{1}{1 - x_0} (x_1, x_2, x_3) \in D$$

$$\pi_H : H^3 \ni (x_0, x_1, x_2, x_3) \longmapsto \frac{1}{x_3 - x_0} (x_1, x_2, 1) \in H$$

は等長写像をあたえている .

## 問題

- 2-1  $H^3$  の 2 点  $p, q$  を結ぶ測地線 (完備性から唯一存在するはず) を具体的に表し, それを用いて, 2 点  $p, q$  の距離 (2 点を結ぶ測地線の長さ) が

$$d(p, q) = \cosh^{-1}(-\langle p, q \rangle)$$

であることを示しなさい. (もちろん  $\langle p, q \rangle \leq -1$  であることを示しておく必要がある.)

- 2-2 球面の測地線の表示を与え, それを用いて球面の 2 点の距離の公式を作りなさい.

- 2-3 補題 2.11 を示しなさい.

- 2-4 正の定数  $c$  に対して

$$H^3(-c^2) := \{p \in L^4 \mid \langle p, p \rangle = -c^{-2}\}$$

とする (これは曲率  $-c^2$  の双曲空間である). この空間の測地線はどのような形に表されるか (厳密な証明は必要ない).

- 2-5 事実 2.17 を示しなさい.

- 2-6 双曲空間で, 二つの測地線  $\gamma_1(t), \gamma_2(t)$  が漸近的であるとき, それらを単位球モデルで表した曲線

$$\pi_D \circ \gamma_1(t), \quad \pi_D \circ \gamma_2(t)$$

は,  $t \rightarrow \infty$  とするときに  $S^2 = \partial D$  上の同一の点に収束することを示しなさい. 上半空間の場合はどうか.